

小石原と肥前地域の窯業の里に着目した 文化的景観の意義に関する考察

内山忠¹・山下三平²・丸谷耕太³・稲上誠⁴・土屋潤⁵

¹ 正会員 博士（工学）九州産業大学景観研究センター（〒 813-8503 福岡県福岡市東区松香台 2-3-1,
E-mail:u.tadasi@ip.kyusan-u.ac.jp)

² 正会員 博士（工学）九州産業大学工学部都市基盤デザイン工学科（〒 813-8503 福岡県福岡市東区松香台 2-3-1,
E-mail:samp@ip.kyusan-u.ac.jp)

³ 非会員 博士（工学）立教大学観光学部（〒 352-8558 埼玉県新座市北野 1-2-26,
E-mail:maruya@rikkyo.ac.jp)

⁴ 非会員 博士（学術）九州産業大学景観研究センター（〒 813-8503 福岡県福岡市東区松香台 2-3-1,
E-mail:inagami@ip.kyusan-u.ac.jp)

⁵ 非会員 博士（工学）九州産業大学景観研究センター（〒 813-8503 福岡県福岡市東区松香台 2-3-1,
E-mail:a.jun@ip.kyusan-u.ac.jp)

窯業の里では、歴史や伝統を積み重ねてきた文化として表象される景観が地域特有の価値を生み出している。目で捉えることのできる景観だけでなく、不可視の要素を含む文化的景観の価値を探ることが地域特有の景観の再発見や、地域活性化へとつながると考える。そこで、窯業の里では窯元毎に歴史があり、各窯元が積み重ねてきた伝統・文化・生業よりつくられる景観が地域の文化的景観を形成していると考え、窯元毎にアンケート調査をおこなった。その結果の考察により各産地の地域特有の文化的景観として基礎的な価値の捉え方や価値を探る事ができた。

キーワード：文化的景観，窯業，アンケート調査，伝統技術

1. 背景と目的

北部九州には多くの窯業に関する里がある。それぞれの地域において、窯業に基づく生業や風土があり、歴史や伝統の積み重ねの相互作用により地域特有の景観を形成してきた¹⁾²⁾³⁾。他方で窯業という産業にとって、近代化という技術革新により生産効率が大きく変化してきた。この様に窯業に基づく生業や風土との相互作用によって形成されてきた景観は、時代的な変化に影響を受けながら生業とともに進化していく様な「生きた景観」である。つまり、窯業の里では、歴史や伝統を積み重ねてきた文化として表象される景観が地域特有の価値を生み出していると考え。よって、目で捉えることのできる景観だけでなく、不可視の要素を含む文化的景観の価値を探ることが地域特有の景観の再発見や、地域活性化へとつながると考える。そこで、本研究の目的は、窯業の地域特有の文化的景観の捉え方と価値を探ることである。具体的には、窯元の歴史や現状、窯業の里として象徴される窯や唐臼の現状や変遷等の基礎情報を踏まえながら文化的景観の意義について考察する。

2. 対象地域について

肥前地域の磁器の生産地である、波佐見町中尾郷（以下中尾郷）（波佐見焼）、三川内地域（三川内焼）、大川内山地域（伊万里鍋島焼）、及び陶器の生産地である小石原地域（小石原焼）の4つ地域を対象とする。これらの地域は、古くから窯業の里として、形成されてきた。各産地の里としての始まり⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾は、表1に示すように1600年中頃で、それぞれ異なる藩の下、波佐見焼と小石原焼は大衆向けに、三川内焼と伊万里鍋島焼は献上品向けに生産された。対象地域は、図1の●に示す位置に存在する。肥前地域の3地域は藩の境界付近に位置し、比較的近い距離にありながら異なる発展を歩んできた。現在の各産地の様子を図2～図5に示す。

3. 文化的景観の捉え方と研究・調査の方法について

文化的景観の捉え方を探るために調査・研究を進めてきた⁴⁾。窯業の里では窯元毎に歴史があり、各窯元が積み



図-1 対象地域の各産地の位置

表-1 各産地の始まりと生産形態

産地	里の始まり	形態	対象地域の場所
波佐見焼	1644年 中尾山開く	大村藩 大衆向け	長崎県東彼杵郡波佐見町中尾地域
三川内焼	1650年平戸中野の陶工全員を三川内山に移す	平戸藩 献上品向け	長崎県佐世保市三川内地域
伊万里鍋島焼	1675年鍋島藩御用窯が大川内山に移される	鍋島藩 献上品向け	佐賀県伊万里市大川内山地域
小石原焼	1669年高取八之丞小石原中野に移る	黒田藩 大衆向け	福岡県朝倉郡東峰村小石原地域



図-2 波佐見町中尾地域



図-3 佐世保市三川内地域



図-4 伊万里市大川内山地域



図-5 東峰村小石原地域

重ねてきた伝統・文化・生業から地域の文化的景観が形成されると考えると、各窯元の歴史や現状、作業工程に関係した意識、近代化の変遷、産地への意識等の基礎情報を得ることが必要である。そこで対象地域の各産地内に位置する各窯元を対象に、アンケートを実施した。また、窯業に関する各地域の文化的景観の価値を探るためには、産地比較することでより明確になると考え、アンケート調査の内容を比較・考察する。具体的なアンケート調査の方法や日時、配布数、回収数については表2に示す。また、アンケートの内容は、表3に示す。

4. アンケート調査による考察と各産地比較

(1) 各産地の開窯時期と立地要因について

(a) 開窯時期について

アンケート調査により、各産地の各窯元の開窯時期について、開窯時期の記述のあった窯元数を母数とした各時期割合を図6に示す。集計結果では、中尾郷は約9割

表-2 調査の方法と調査日時について

項目	アンケート調査概要
配布方法と回収方法	波佐見町中尾郷：波佐見焼振興会の協力を得て、波佐見中尾郷の窯元へ配布及び回収 三川内：三川内にて生産している窯元を訪れ、ヒアリング形式にて、その場でアンケートに記入。もしくは、調査票を配布し、後日回収。 大川内山：伊万里鍋島焼協同組合のを得て、伊万里市大川内山の窯元へ配布及び回収 小石原：個別に配布し、後日回収
調査日時	波佐見町中尾郷：2013年10月26日～11月15日（10月26日配布、11月15日回収） 三川内：2013年10月22日、29日、30日 大川内山：2013年10月30日～11月30日（10月30日配布、11月20日、30日回収） 小石原：2012年11月1日～22日（11月1日配布、11月8日、17日、18日回収）
調査対象	波佐見町中尾郷：長崎県東彼杵郡波佐見町中尾郷の窯元を対象とした20軒 三川内：長崎県佐世保市三川内皿山の窯元を対象とした12軒 大川内山：佐賀県伊万里市大川内山の窯元を対象とした30軒 小石原：東峰村小石原の小石原焼陶器協同組合に所属する窯元を対象とした44軒
回収数と配布数	波佐見町中尾郷：回収数15、配布数20 三川内：回収数10、配布数12 大川内山：回収数11、配布数30 小石原：回収数41、配布数44

表-3 調査票の内容

項目	項目の内容
A. 原材料について	陶土・釉薬の変遷とこれらに対する意識、山との関係
B. 窯と燃料について	使用する窯と燃料となる薪の変遷、及び窯に対する意識
C. 水の利用について	唐臼のかつての使用状況と意識、取水地と水と作陶の関係と意識、川に対する意識
D. 成形と絵付けについて	成形及び絵付けの変遷
E. 焼物と街について	街並みの変化に対する意識、イベントに対する意識、焼物に対する問題点等
F. 窯元について	開窯年、生産販売状況、在住歴と技法の習得、窯元の立地要因、各工程の重要な意識、まちづくり活動への参加

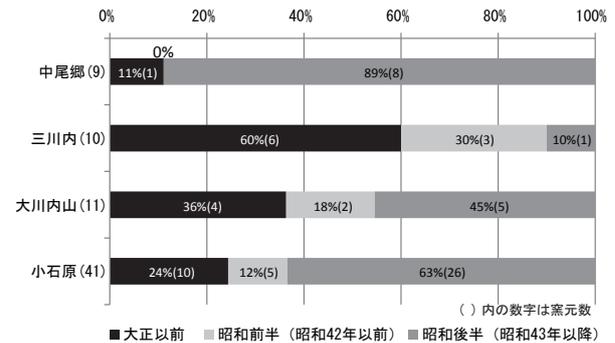


図-6 窯元の開窯時期による産地比較

の窯元が昭和後半に開窯しており、開窯時期が比較的新しい。中尾郷は世襲よりも窯元が新たに入りながら、窯業の里として形成されてきている。三川内では、6割の窯元が大正以前に開窯しており、世襲により窯元が継承されている。大川内山では、大正以前に約3割、昭和前期に約2割、昭和後半に約4割が開窯しており、世襲と新たな窯元の双方により、窯業の里として形成されてきている。小石原では、約6割が昭和後期に開窯しており、新たな窯元ができながら窯業の里が形成されてきた。

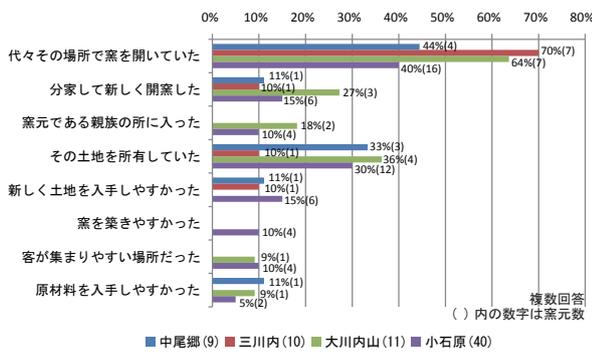


図-7 産地別の窯元の立地要因

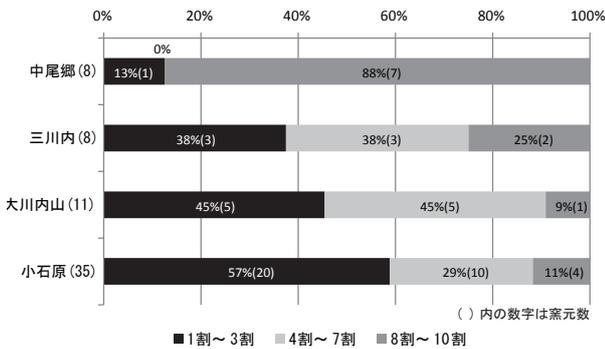


図-8 産地別の受注生産の割合

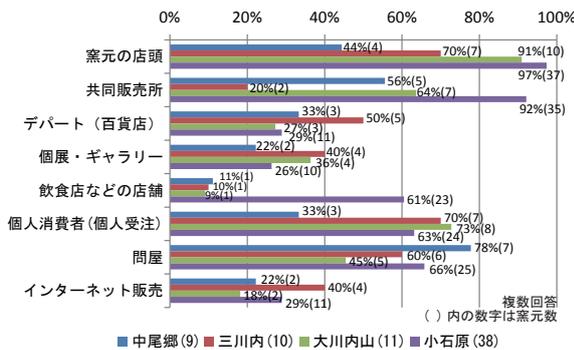


図-9 産地別の販売先の割合

(b) 窯元の立地要因に対する意識

窯元に現在の場所で開窯している理由として複数回答してもらい、各産地の回答のあった窯元数を母数として立地要因の割合を示したものが図7である。

どの産地も「代々その場所で窯を開いていた」との立地要因をあげた割合が高い。中尾郷や小石原は、開窯時期が「昭和後期」の窯元が多く、新たに開窯する窯元にとって、その産地以外を選択することもできたと考えられる。「その土地を所有していた」の割合が2番目に高く、開窯の際、窯元自身と関わりある土地を選択している点については、各産地に魅力を感じている窯元が多いと考えられる。つまりどの産地でも代々その場所で窯業と関わりながら、生産を続け、歴史や文化の積み重なってきた土地の価値や魅力が存在していると考えられる。

(2) 各産地の窯元における受注生産と販売先

図9より、中尾郷では受注生産が8割～10割と回答している割合は88%である。一方で、三川内、大川内山、小石原では受注生産が8割～10割と回答している割合は

それぞれ25%、9%、11%と一番低い。特に小石原では受注生産よりも見込生産の割合が高い産地と言える。

また、窯元に販売先として複数回答してもらい各産地の回答のあった窯元数を母数として販売先の割合を示したものが図8である。図8より、中尾郷では「問屋」が78%と割合が高く、他の販売先は60%未満と低い。三川内では「窯元の店頭」「個人消費者」が70%、「問屋」が60%と高い。大川内山では「窯元の店頭」「共同販売所」「個人消費者」が60%以上と高い。小石原では「窯元の店頭」「共同販売所」が90%以上と高い。以上から中尾郷では、問屋からの受注生産であり、生産の場としての要素が強い。中尾郷と比べ、三川内や大川内山、小石原では、見込み生産の割合が高く窯元の店頭で訪問客への販売であり、産地へ訪問してもらう場としての要素が強い。

(3) 窯の変遷と問題意識について

(a) 各産地の窯の変遷

回答のあった各窯元の窯の利用変化は各窯元で異なるが、各産地の傾向についてまとめたものを図10に示す。

中尾郷の傾向として、大正以前に開窯した窯元は共同の登り窯を使用していたが、その後、石炭窯、ガス窯へと使用する窯が変化する。近年に開窯した窯元はガス窯の使用で、電気窯やシャトル窯の併用もみられる。

三川内の傾向として、大正以前から続く窯元が比較的多く、それらの窯元は共同の登り窯を使用していたが、その後、石炭窯、重油窯、ガス窯へと使用する窯が変化する。近年はガス窯と電気窯の併用使用である。

大川内山の傾向として、共同の登り窯が現在も1つ現存し、イベントに合わせて技術継承のために共同利用している。古くから続く窯元は他地区同様に石炭窯、重油窯、ガス窯へと使用する窯が変化する。近年はガス窯と電気窯の併用使用である。また、個人の登り窯を使用している窯元も数軒ある。

小石原の傾向として、大正以前から続く窯元では共同で登り窯を使用していた。昭和30年代に開窯した窯元は個人の登り窯を使用していた。その後、これらの窯元はガス窯の使用に変化する。現在ではガス窯を使用しているが、規模の小さい薪を使用する穴窯や単窯を併用使用する窯元もみられる。

歴史ある窯元の多くは、登り窯、石炭窯、重油窯、ガス窯と変化していることが分かった。また、残っている石炭窯の煙突は窯業の里の景観として意識されているがその使用年数は短い。また、薪窯を使用する大川内山や小石原は生産効率よりも伝統文化として焼成技術が残る産地である。

(b) 今後の登り窯の在り方について

窯業の生産と文化に関係する登り窯の今後の在り方について複数回答してもらい、各産地の回答のあった窯元

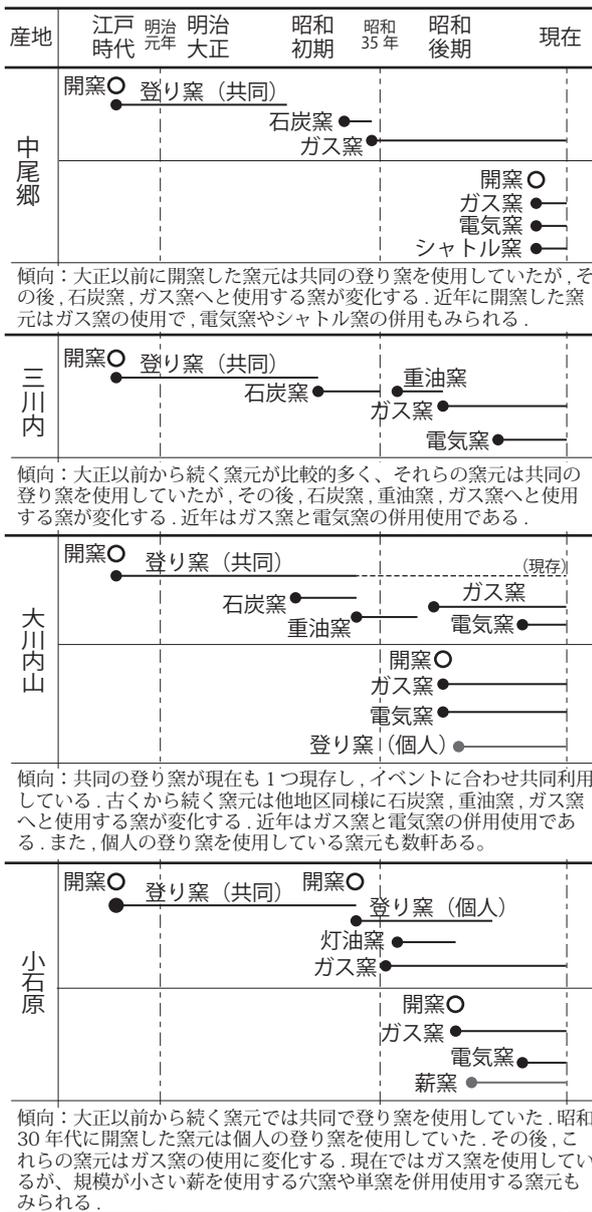


図-10 産地別の窯の変化の傾向

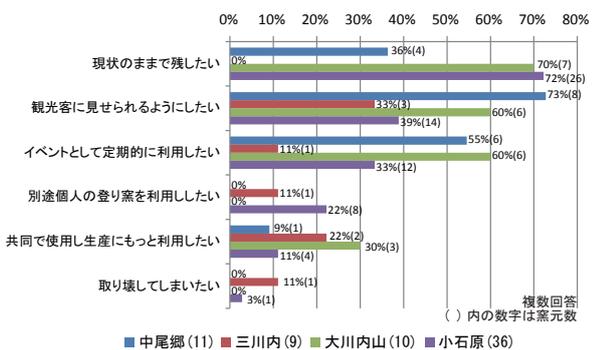


図-11 産地別の登り窯の今後の在り方について

数を母数とし、各項目の割合を示したものが図11である。

中尾郷では、現在登り窯の利用はないが、世界最大級の登り窯跡が2つある。現在、その1つの大新登窯跡の復元整備が進められている。大量生産や効率性を求めていた中尾郷の歴史を感じる遺産として「観光客に見せられるようにしたい」と考えているであろう窯元が73%と最も高い。次に「イベントとして定期的に利用したい」

が55%と高い。登り窯の利用は集客力や窯業の里を示すものとして捉えられていることが伺える。

三川内ではどの項目も割合が低い。より均一な白い磁器を求めていた三川内焼にとって窯変のおこる登り窯の利用は効率的な面で難しいことが要因と考えられる。しかし、技術的な面での継承を考慮し、40代を中心に登り窯の再利用が進められている。

大川内山では、「現状のままで残したい」が75%で最も高く、次いで、「観光客に見せられるようにしたい」「イベントとして定期的に利用したい」が63%と高い。現在も共同の登り窯が1つ存在し、技術の継承を考慮し、イベントと関連させながら定期的に登り窯を利用している。地域の窯元で共同した取り組みであり、非常に上手に利用されている。

小石原では、現在も個人で登り窯を使用している窯元や規模の小さい薪窯の利用があり、焼成技術に関心がある事が伺える。

(4) 唐臼の現状と利用について

唐臼は水力を利用し、陶石を粉砕する道具であり、登り窯や石炭窯の煙突と同様に窯業の里を象徴する要素の一つである。現在では中尾郷を除き、観光用として1基あり、大川内山と小石原は現在も動いている。その唐臼の今後の在り方について、各産地の回答のあった窯元数を母数とした各項目の割合を示したものが図12である。同様に唐臼の数について示したものが図13である。どの産地も唐臼の今後在り方については「作業用でなく観光用として残したい」、唐臼の数については「唐臼は現状のままでよい」と回答した割合が最も高い。陶石を粉砕する工程は、企業の工場でおこなうか、または、個人の窯元でスタンプパーを利用する様になり、唐臼を利用するメリットはかなり小さい。上述した様に唐臼は窯業の里を象徴する要素の一つであり、現在の唐臼の状況を考えると寂しい回答である。陶土粉砕工程は近代化の影響を受け、窯業の里の文化的景観として大きな変化の一つと言える。

(5) 産地の抱える問題について

現在の産地の抱える問題について複数回答してもらったものが表4であり、各産地の回答のあった窯元数を母数とした各項目の割合も示す。

中尾郷では「後継者がいない」と回答した割合が80%と最も高く、次いで「原材料や設備など生産コストが高い」が60%とやや高い。窯元や生産など地域内に関わる問題意識と言える。

三川内では「産地の知名度が足りない」が90%と最も高い。「売り上げが少ない」が70%と次に高い。観光や経済的な側面であり地域外と関わる問題意識と言える。

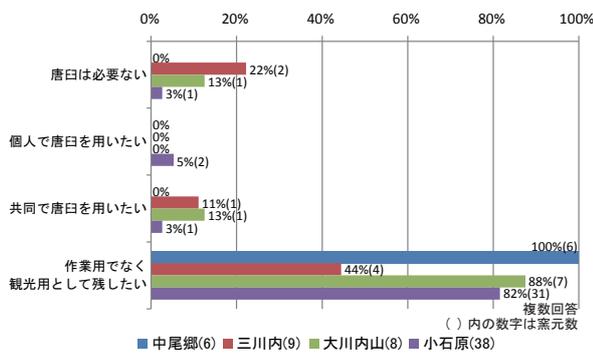


図-12 産地別の唐臼の今後の在り方について

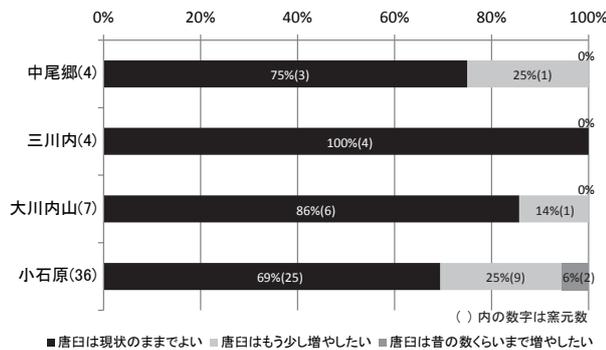


図-13 産地別の今後の唐臼の数について

表-4 産地の問題についての回答数と割合

産地の問題について	中尾郷	三川内	大川内山	小石原
売上げが少ない	4 (40%)	7 (70%)	9 (82%)	33 (83%)
販路開拓が困難である	3 (30%)	4 (40%)	4 (36%)	14 (35%)
産地の知名度が足りない	1 (10%)	9 (90%)	2 (18%)	20 (50%)
後継者がいない	8 (80%)	5 (50%)	3 (27%)	7 (18%)
原材料が不足している	0 (0%)	0 (0%)	1 (9%)	2 (5%)
道具の生産が不足している	2 (20%)	0 (0%)	1 (9%)	0 (0%)
原材料や設備など生産コストが高い	6 (60%)	3 (30%)	6 (55%)	12 (30%)
消費者にニーズに合った新商品開発が難しい	1 (10%)	2 (20%)	4 (36%)	6 (15%)
組織力が不足している	2 (20%)	5 (50%)	1 (9%)	11 (28%)
伝統の維持が困難である	2 (20%)	2 (20%)	2 (18%)	1 (3%)
特にない	0 (0%)	1 (10%)	1 (9%)	2 (5%)
回答のあった窯元軒	10 (100%)	10 (100%)	11 (100%)	40 (100%)

大川内山では「売上げが少ない」が89%と最も高く、「原材料や設備など生産コストが高い」が56%とやや高い。経済的な側面と生産についてであり地域内・外の両方に関係する問題意識と言える。

小石原では「売上げが少ない」が83%と最も高く、「産地の知名度が足りない」が50%とやや高い。観光や経済的な側面であり問題意識として三川内と類似している。

5. まとめ

本研究は窯業の里である中尾郷、三川内、大川内山、小石原の4地域について、各窯元の歴史や現状や、窯業の里の象徴的要素である登り窯や唐臼の現状や今後の在り方等に関する意識について比較・考察した。その結果、各産地の地域特有の文化的景観として基礎的な価値を捉え、探る事ができた。各産地の文化的景観を踏まえたまちづくりへの基礎的な方針について産地毎にまとめる。

中尾郷では大衆向けに始まり、現在でも効率性を求めた生産地域と言える。生産の効率性を求めた結果として世界最大規模の登り窯跡や石炭窯の比較的大きな煙突などが存在し、窯業の里として継承されている。窯業に関する遺物を基に歴史的な積み重ねを説明していくことが地域の文化的景観の再評価につながると考える。

三川内では、献上品生産に始まり、技術の向上を求めた生産地域と言える。個々の窯元で技術を磨いてきたためか、歴史ある窯元が多い割に地域の魅力づくりへの意識が低い。産地の知名度をあげるためにも文化的景観を見直し、伝統的な生産技術をより気軽に観光客に見てもらえるような工夫が必要と考える。また、地域のコミュニティ作りにも努力が必要である。

大川内山では、技術の伝承をしてきた生産地域と言える。現在でも地域イベントとして登り窯を利用し、人材育成として技術を伝えている。今後もイベントなどに合わせ、積み重ねてきた技術の伝承を説明していくことが文化的景観の価値や磁器の生産の理解を深め、来訪者の購買意欲につながると考える。

小石原では、窯業の産地としての問題意識も高く、現在も薪窯の利用など伝統的な生産工程が残る産地である。窯元毎に生産された陶器が窯元の店頭や共同販売所に陳列され、窯元毎に異なる陶器を楽しめる。伝統技術を維持しながら窯元毎の特徴を説明していく事が文化的景観を深め、来訪者の購買意欲につながると考える。

謝辞: 本研究は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「北部九州の窯業に着目した文化的景観の形成と保全に関する研究」(No. S1203007)の助成を受けて作成された。また、本調査に協力頂いた波佐見焼振興会、伊万里鍋島焼協同組合、三川内焼陶磁器工業協同組合、小石原焼陶器協同組合、及び各産地の窯元各位にこの場を借りて感謝の意を表したい。

参考文献

- 轟慎一、盛千嘉：信楽町長野における窯元の敷地空間構成と空間資源の活用、都市計画論文集、48、pp.387-392、2013
- 山口知恵、松本将一郎、西山徳明：小鹿田焼の里山山における伝統的な生業の持続と文化的景観の保全に関する研究、日本建築学会計画系論文集、74、pp.2215-2222、2009-10
- 丸谷耕太・山下三平・内山忠・小川勇樹：小石原焼の里における作陶に関わる文化的景観の変容に関する研究、都市計画学会論文集、49(1)、pp.83-92、2014.
- 内山忠、山下三平、丸谷耕太、濱田英里、豊岡広平：肥前地域の窯業における窯の変化に着目した文化的景観に関する研究、土木学会西部支部研究発表会、福岡市、2014.3.
- 波佐見焼振興会：長崎のやきもの波佐見焼 Handbook、印刷株式会社リューブ、2012.07
- 三川内地区生涯学習推進会：三川内地区郷土史、隆文社、1991.12
- 羽田新：伊万里鍋島焼の産地構造と窯元、明治学院論叢(546)、pp.19-65、1994.11
- 小石原村：小石原村誌、2001.03